

## I 研究の背景

文部科学省は平成 15 年度報告書「生徒指導上の諸問題の現状について」で、4 年連続で減少していた児童・生徒の自殺（公立小学校・中学校・高等学校）が 14 名増加し、137 名に上ったと発表した。

また、平成 16 年 6 月長崎県における小学校 6 年生女子による同級生の殺傷事件、同年東京都における中学 2 年生男子による幼児殺傷事件、平成 17 年に高校 1 年生男子による同学年女子の殺傷事件など、子供たちによる殺傷事件が相次いだ。

さらに、平成 18 年 10 月以降には、いじめによる自殺が相次ぎ、子供世界の人間関係の歪みによる事件が、今なお、深刻であることが再認識された。

東京都教育相談センターは、上記のような児童・生徒の自殺、殺傷事件等の衝撃的な事件・事故後の児童・生徒への「心のケア」のために緊急支援を行っている。平成 15 年から 17 年にかけて 50 件の緊急支援を行った。その事件・事故の背景に潜む子供たちの心理状況を推察するとき、また、学校に出向いて行う事例検討会や教師の相談の中に浮かび上がってくる事例の背景や子供たちの状況を見ると、現代の子供たちが抱えている生きにくさ、生の不充足感が強く感じられる。

また、当センターが行っている来所相談事例においても、リストカットをする子供たち、及び、不登校の子供たちの中に、無気力な抑うつ状態を呈していて、真に充実感を感じて生きているとは言い難い状況が見られる。さらに、強い葛藤あるいは逆に葛藤を抱かないようにあきらめとも取れる感情を抱きながら過ごしている状況が見受けられる。そして、これは、単に問題をかかえる子供たちだけのことでなく、現代の思春期の子供たちの心性の状況を表しているように感じられる。

このような状況の中で、思春期の子供たちが抱える生きにくさとはどのようなものであるか、どのような気持ちで生きようとしているかを探ることは、子供たちが充足感をもって生きていくために心理的、教育的な支援を行う上で、大変に重要である。

思春期の子供たちは、日々どのような心理や意識で生きているのか、また、生きていくうえで避けて通ることができない悩みや不安に陥ったとき、どのような状態になり、乗り越えるためにどのような対処をしているのかなど、子供たちの生きていくことにかかわる心理を究明することで、子供たちへの支援の方途を明らかにしたいと考えた。

## II 本研究の目的と方法

### 1 目的

「思春期の心理と行動に関する意識調査」を行い、現代の思春期の子供たちの「生」にかかわる意識をとらえる。

- (1) どのような意識で日々を過ごしているのか。
- (2) 悩み・不安などに陥ったときに、どのような状態になり、どのような対処方法を用いているのか。

## 2 研究の方法 — 意識調査の作成と実施 —

### (1) 予備調査

精度の高い調査項目によって構成された意識調査を作成するために、次の手順で予備調査を行った。

#### ① 設問Ⅰ 「思春期の心理」

設問Ⅰは、自我形成の重要な時期である思春期の心理全般をとらえることを基本としながらも、子供の生きることにかかわる心理をとらえられるよう、次の5つの観点を設定した。この観点に沿って、60項目の調査項目（表1参照）を作成した。

- 自己肯定感：自尊感情・自負心
- うつ気分・不安感：憂うつ・無気力・先への不安
- 他者との関係の希薄さ：親密度・支えられ感・信頼関係（家族・友だち・先生・他者）
- 自分に関すること：きまじめさ・思考の柔軟性のなさ・几帳面さ・生きにくさ
- 攻撃性：破壊性・反抗心・恨み・イライラ感

#### ② 設問Ⅱ 「対処方法」

設問Ⅱは、不安や葛藤、悩み等のストレス状況に対してどのような対処方法をとっているかをとらえるために、下記の5つの対処方法の観点を設定した。

- 解決行動（主体的な取組・相談）
- 攻撃行動（自罰・他罰）
- 自己統制（内閉・諦観）
- 発散行動（昇華・回避・気晴らし）
- 心理状況

項目作成に当たっては、ストレス状況に陥った際の心理状況を加えるとともに、この観点到添って、20項目の調査項目（巻末資料1「予備調査用紙」参照）を作成した。

「設問Ⅰ」「設問Ⅱ」各々の調査項目を、それぞれ中立的な順序で並べ、4件法（そう思う・少し思う・あまり思わない・思わない）で回答するように求めた。調査用紙の最後に自由記述欄を設け、「思春期の心理と行動に関する意識調査」と題した調査用紙を作成した。

#### ③ 予備調査の実施

調査対象は、中学・高校生各学年100名前後のデータが確保されるよう、また地域、学科が片寄らないよう、東京都公立中学校2校、都立高校3校に、各学年1学級ずつ調査を依頼した。調査は平成18年2月から3月にかけて実施した。調査実施数は、1,045名（中学生：616名、高校生：429名）であった。

#### ④ 調査項目の精査と本調査項目の決定

##### ア 有効データ

上記の調査実施数から、無記入及び無効回答と判断された回答が1項目でもあるデータを削除し、有効データとした。有効データ数は、888名（中学生：507名、高校生：381名）である。

表1:予備調査 因子分析の結果

【5因子解】 60項目(主因子解、バリマックス回転)後、項目削除 888名

	No.	項 目	F1	F2	F3	F4	F5
第1因子	9	悲しい気分になることがある	0.719			0.117	
	58	悩んだり迷ったりすることがある	0.713				
	32	イライラすることがある	0.613	-0.112		0.140	-0.108
	16	何かをする時、失敗しないか心配になる	0.583	0.101			
	4	人からどう思われているか気になる	0.551	0.110			0.174
	42	友だちが楽しそうにしていると、うらやましくなる	0.489		0.109	0.213	0.135
	48	みんなの前でうまくやれないと悔しい	0.477	0.150	0.288		
	20	悪いことが起こると自分のせいだと思ってしまう	0.460	0.125		0.233	0.221
	6	物事がうまくいかないと頭にくる	0.457		0.243	0.179	
第2因子	21	つらい時励ましてくれる家族がいる		0.740			0.250
	17	私は親から信用されている		0.674	0.180		
	11	大事なことは親と相談して決める	0.180	0.658			
	60	家が一番安心できる		0.646			-0.124
	36	家族でくつろぐ時間がある		0.613			0.110
第3因子	1	自分のすることには自信がある	-0.157		0.692		
	56	自分は何でもうまくやれる	-0.154		0.642	0.242	
	13	自分は人の役に立つことができる		0.124	0.629	0.122	0.210
	23	今の自分に満足している	-0.305	0.163	0.528		0.210
	51	自分でやらないと安心できない	0.309		0.482		-0.116
第4因子	57	生きていても仕方ないという気持ちになることがある	0.316	-0.170	-0.186	0.535	-0.119
	24	自分はどうなってもかまわない			-0.142	0.528	0.148
	14	何事にも興味もてない			-0.162	0.515	-0.126
	30	相手の言葉にすぐつかかりたくなる	0.169		0.209	0.510	-0.118
	35	めちゃくちゃな行動をしたくなる	0.133	-0.271	0.196	0.481	0.229
第5因子	26	友だちといると楽しい	0.202		0.130	-0.239	0.665
	5	困ったとき相談できる友だちがいる	0.195	0.169	0.121	-0.109	0.644
	45	友だちは私の気持ちをよくわかってくれる		0.225	0.141		0.605
	2	誰とでも気軽に話したり、遊んだりする方である			0.347		0.544
因子外項目	3	親は私のことを理解してくれる *		0.729	0.129		0.138
	7	自分には何が向いているのか考えている	0.387	0.116	0.281		
	8	気分が落ち込むことがある *	0.748				
	10	決められたことはしなければならぬと思う	0.319	0.331	0.146	-0.206	
	12	自分のやり方を注意されると、反発したくなる	0.331	-0.145	0.312	0.207	
	15	私のことをよくわかってくれる先生がいる		0.375			0.407
	18	危険なことをあえてやりたくなる		-0.239	0.283	0.344	0.279
	19	自分にはいいところがある *		0.189	0.684	-0.113	0.222
	22	やり出したら最後までやらないと気が済まない	0.116	0.129	0.369		0.187
	25	眠れないことがある	0.260	-0.123		0.342	
	27	人とかかわりたくない	0.109			0.531	-0.467
	28	世の中はイヤなことばかりだ	0.388	-0.112		0.408	-0.237
	29	メールだけでつき合っている友だちしかいない *				0.616	
	31	やりたいと思ったことはやってみる	0.116	0.117	0.421		0.202
	33	何かあったら先生に相談したい *		0.418		0.279	0.299
	34	約束の時間には遅れないようにしている	0.174	0.161	0.138		
	37	自分は幸せだと思う		0.482	0.334	-0.183	0.242
	38	この頃集中できない	0.374	-0.167		0.313	
	39	うちの家族は何を考えているかわからない	0.203	-0.453		0.341	
	40	計画通りに進まない嫌だ	-0.315		0.388	0.131	-0.163
	41	友だちとは直接話すよりメールの方が気が楽だ				0.404	
	43	今の生活は楽しい		0.336	0.299	-0.126	0.489
	44	ちょっとでも嫌なことがあると「もうダメだ」と思ってしまう	0.443			0.420	
	46	手を抜いたり、サボる人を見ると嫌になる	0.343	0.247	0.347		
	47	私は親と仲がいい *		0.789			
	49	自分は生きる価値のある人間だ *		0.295	0.608	-0.272	0.132
	50	不安になることがある *	0.727			0.115	
	52	親を尊敬している *		0.746	0.137		
	53	友だちを過ごすよりゲームやインターネットで遊ぶ方がいい		0.124		0.531	-0.374
	54	自分より注目されている人を見ると、むかつく	0.200		0.401	0.392	
55	人が信じられない	0.261			0.508	-0.415	
59	自分のことなど誰にもわからない	0.259	-0.139		0.413	-0.389	

\* 因子負荷の欄の空欄は、0.000未満のもの

## イ「設問Ⅰ」調査項目の決定

### (ア) 因子分析(\*注1)の実施

「設問Ⅰ」の調査項目の精度を高めるために、有効データに下記の手順で因子分析を施した。その結果、表1に示すように、解釈可能性を考慮し、5因子を選んだ。これらの因子に対応する項目として、以下の基準から適しているものを採用した。

- i 「各因子の意味内容をよく表すものとして、互いに内容の合致する項目」を採用する。
- ii 「当該因子への負荷の高い項目」を採用する(因子負荷0.45以上を採用)。
- iii 「複数の因子に高い因子負荷を示す項目」は除外する。

その上で、「度数分布から、回答傾向に明らかな偏りのみられる項目」、「項目間相関が高い項目の中で、数項目に相関の高い項目」について、項目内容等を勘案して9項目(表3の項目欄の末尾に\*をつけた項目)を削除し、28項目を選択した。

### (イ) 因子の命名

- 第1因子:「不安・抑うつ感」(9項目)
- 第2因子:「家族親和感」(5項目)
- 第3因子:「自己肯定感」(5項目)
- 第4因子:「自暴自棄感」(5項目)
- 第5因子:「友だち友好感」(4項目)

各因子を代表する項目は表1に示す通りである。この28項目に、項目内容として、几帳面さ、攻撃性をとらえる次の4項目を加えた32項目を本調査項目とした。

- ・自分のやり方を注意されると、反発したくなる
- ・決められたことはしなければならぬと思う
- ・やり出したら最後までやらないと気がすまない
- ・自分より注目されている人を見ると、むかつく

## ウ「設問Ⅱ」調査項目の決定

「設問Ⅱ」の項目については、項目選択の傾向等基本統計を参考にしながら、項目内容から吟味した。その結果、「相談をする」については対象を分けずに「誰かに相談する」の1項目にまとめ、自傷行為としてもとらえられる摂食障害を想定した「やけ食いをする」を追加し、全体に文言の修正を加えた上で以下の20項目を確定した。

- 解決行動:・自分でどうすればよいか考える
  - 発散行動:・思い切り大声を出す
  - 自己統制:・自分の部屋にこもる
  - 攻撃行動:・自分を傷つける
  - 心理状況:・何もしたくなくなる
- ・誰かに相談する
  - ・友だちとおしゃべりしたり、メールをしたりする
  - ・趣味に没頭する
  - ・インターネットやゲームで遊ぶ
  - ・スポーツに熱中する
  - ・人に当たる
  - ・物に当たる
  - ・やけ食いをする
  - ・イライラする
  - ・体調が崩れる
  - ・ボーッとする
  - ・何も考えられなくなる

(\*注1) 因子分析は、「設問Ⅰ」のような多くの変数を解析する際に、比較的少数の共通する潜在的な要素(これを因子と言う)を、重みづけ(これを因子負荷量と言う)して集約的に表す、心理統計学上の一手法。

## (2) 本調査

### ① 本調査の実施

#### ア 調査対象の抽出

本研究では、規準集団を東京都の公立中学・高等学校の生徒として標本抽出を行った。標本抽出は、標本の精度を高めるため層化抽出法を取り入れ、無作為抽出法により、標本を選んだ。標本抽出数は、中学・高校各々1,000名ずつとし、標本抽出は、平成17年度「東京都公立学校一覧」（東京都教育委員会刊）に基づいて行った。

#### (ア) 中学校

標本抽出数1,000名の抽出は、1学年340名、1学級35名基準で、10学級分、10校（各校各学年1学級ずつ）を想定した。層としては「地域」を採用した。東京都における中学校の生徒数（学校数）の区部対市町村部の割合はおおよそ2：1であるので、10校を6：4で各地域から選んだ。学校数、学級数を勘案して、行政順に区部を6地域、市町村部を4地域に分け、各々から各1校に、各学年1学級ずつ調査を依頼した。

#### (イ) 高等学校

都立高校については、層として「学年」「課程」「学科（普通科・専門学科・総合学科）」「学年制・単位制」「地域」を採用した。

平成17年度都立高校在学者数136,069名について、全体を1,000として、学年別に1年、2年、3年、4年（定時制）、及び単位制（無学年として）に分け、その人数割合に応じて、想定数を各々315名、315名、315名、25名、40名とした。

次に、「課程」については、全日制課程と定時制課程の生徒数122,837：13,232（9：1）の割合に応じて抽出した。

「学科」については、全日制課程では、普通科、専門学科、総合学科について抽出数を算定した。総合学科は、1,000に対する割合が16となり、1学級に満たないので、今回は標本として抽出しないこととした。普通科と専門学科の割合は2：1で、普通科は1学年230名ずつで、1学級30名として、8学級を抽出する。専門学科は商業科と工業科を選定し、8,049：9,997の人数比から各1学級ずつ抽出することとした。

定時制課程に関しては、全日制課程の割合から、各学年25名ずつ、100名とした。学級数は各学年2学級として、2校で選ぶ。また、専門学科については各学年25名ずつなので問わないこととした。

「地域」については、学区の廃止で都内全域からの通学であるが、広範な地域の生徒がとらえられるよう、都内3箇所为学校経営支援センターの区分に合わせ、各々から4校ずつ抽出した。

#### イ 調査の実施状況

#### (ア) 調査対象数

上記の経緯で抽出した生徒に調査を実施し、中学校2,009名、高校1,485名（全日制課程：1,281名、定時制課程：204名）計3,494名のデータを得た。学年別では中1：722名、中2：699名、中3：588名、高1：522名、高2：496名、高3：452名、高4：15名（高校は全定合計）、性別でみると、男子：1,762名、女子：1,720名、不明：12名である。な

お、都立高校については、調査対象の22校中、全定両課程で実施が2校、定時制課程3校の内1校は、チャレンジスクール(単位制)である。また全日制課程にはエンカレッジスクールが1校含まれている。単位制については、相当学年に組み入れて集計した。

ウ 調査時期

本調査は平成18年の夏休み明け8月下旬から10月初旬にかけて実施した。

② 有効データの作成

回収した3,494名のデータのうち、無記入及び無効回答と判断された回答が1項目でもあるデータを削除し、有効データとした。総件数3,045件の内訳を表2に示す。なお、学年別にみるときは、高校定時制課程4年生は11名であるので、省略して示している。

表2：有効データ内訳(学年別・性別)

(単位：名)

校種	学 年	男 子	女 子	不 明	計	
中 学 校	1 年	306	321	2	629	
	2 年	314	301	2	617	
	3 年	245	257	1	503	
	計	865	879	5	1,749	
高 等 学 校	1年	全日制	194	192	1	387
		定時制	20	36	0	56
		計	214	228	1	443
	2年	全日制	194	192	3	389
		定時制	25	28	0	53
		計	219	220	3	442
	3年	全日制	180	177	1	358
		定時制	20	22	0	42
		計	200	199	1	400
	4年	全日制	—	—	—	—
		定時制	5	6	0	11
		計	5	6	0	11
計	全日制	568	561	5	1,134	
	定時制	70	92	0	162	
	計	638	653	5	1,296	
合 計		1,503	1,532	10	3,045	